

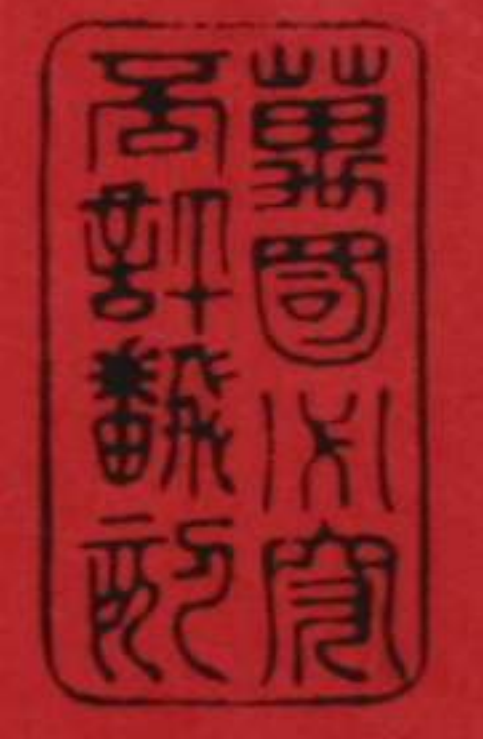
3764

茶溪鈴木先生著
多氣志樓主人註

唐太日記

全二冊

橋本玉蘭翁畫文苑閣藏板



唐太日記例言

此日記者、元禄九年冬、予物主也。あるは唯余の五百里外の
... (transcription of the handwritten text) ...

唐太日記 例言

甲程のあまのこ又やせしる事記すし夷人の記述と陸唐の
二を並べてその故のこまあり故に後述悔情の時よふそ
遠近の思ひ違ひしる事記すし

とある甲寅の年を唐の皇七の年と記すの西宮下を以て

新小室の事あり

はちとる事儀を甲寅の文書の事ありしりよありて陸唐
傳島より後せらむとクニユタニといふ事運上を記す下あり
シエヤ越と云ふは山程開闢と申和人の事といふ事あり
るりたる事ありし中記踏破して東國なるナイブツといふ

出来より契トツリの蹟を探りマニイといふ事あり西宮の
越よりとシラヌといふ事ありソウヤハ乃後海場へ歸らむ後海
の風を待たむ事十余日の事記中よりしる事あり松澤して
置れと彼地は此方の海所道ありし舟と云ふ事あり
な事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
余を返す事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
欠伸を慰めし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
伊勢の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
松浦竹四郎源弘
あはれ四丁この欄の中は各各の儀全き事ありし事ありし

甲寅 唐太日記卷の上

多氣志郎 松浦弘 評注

嘉永甲寅六月余堀使君ヨホリシケン後ノチハ蝦夷地エゾの西浦を巡視メグルしてソウ

ヤフトトハの波ナミ海場ウミノヘ所トコロありカカラ 小風待コカゼマツ也

同十二日順風ジュンフウして同所ドウジョを出帆シュッパンし唐太島カラフトシマある志良努之シラヌシへ向ムクて

颯ササしメ

注志良努之ハ唐太島の南第一岬西ニしてトロの崎の少シ西岬シマあり後ろノチ山有是ヤマアリニシテ靠ツクて一小湾コウヅミを覗ノゾクしソウヤと去サる
こ十八里コトハチリとシて極高ツクシクタカシ凡ニ四十六度余也ヨシバシラヌシシラヌシシラウシの

誤言也シラ、と岩の^トあり、ウ^ニと^クと云^ト此地前^ニ一ツ
の礁あるの故^ニ辨る^ル會所一棟其外蔵^ニ夷家七軒甲寅
の頃迄ハ山靱人等爰^ニ来りて交易をなせ^リたり
風西^ニ轉^リたれ^ニ區春許潭^ニ向て颯^リウ^ニ此夜ハ洋中^ニて夜
を明^シ翌

十三日未明より朝嵐^ニ帆を^シ起^シし遣^ルふ其湾中鯨魚潮を
噴上げて其眺めい^ハん^ハく^ハれ^ハ辰時前同所^ニ著^リたり

注區春許潭^ハ當島第一の好港西人爰^ニ指^シてアニソ港と
云運上屋元^ニて建物蔵^ニて弁天社等美^ク敷^クたり其
北八丁^ニバコドマリ南三十余丁^ニあり^クポロアンドマリ等

何處も番屋蔵^ニあり大船何程^ニても前^ニ滯碇^シたり不^コ宜^シ
此所ハ癸丑の秋魯夷来住せ^リ地あり地名クニ^ニン^ト浪無^シ
静^カあると云コタン^ト所^ト云儀なり実^ニ好港^ニ依^テ辨^ケし
とのゆり

村垣使君其余僚属も亦皆同日ふ上岨^ニたり是より先^ニ渡^リ
越^スる人^ト一同會合^シて唐太東西巡視の事を謀^リ兼^テハ堀
使君東浦村垣使君ハ西浦巡視の心組^{あり}し^ハ糧米人夫^{あり}と
差支^ハの事^ト出来^テ東西手分^{あり}難^クれ^ハ兩使君とも
ふ西浦より巡視^{あり}し^トなり余ハ國思^ひて^モ從^ひま^り
と^ハ兼^テ而思^ひな^りともかく差支^もある^ハ水野氏^ト
正太^ト也^ト

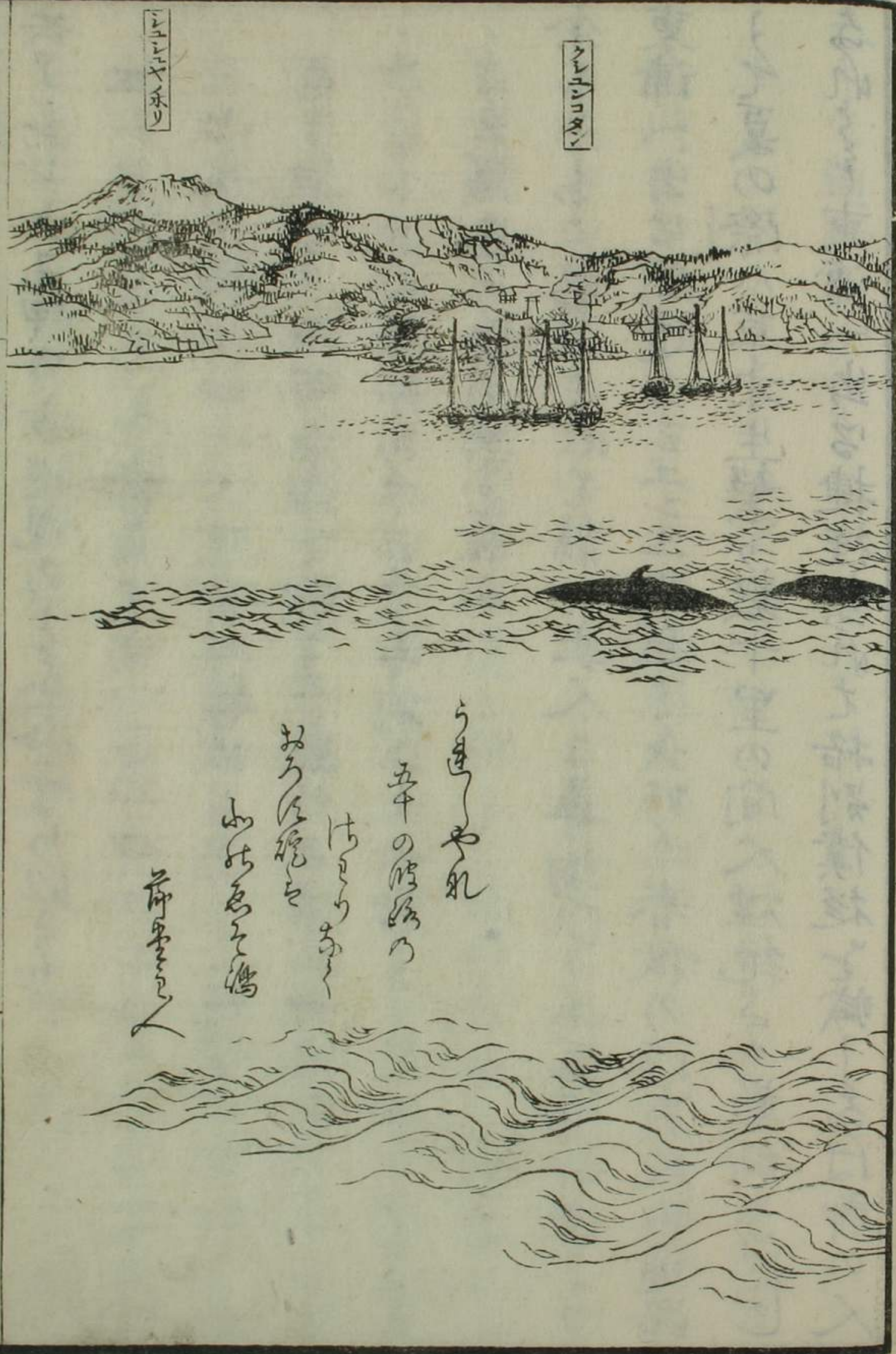


三氣志樓主人 圖

トウツ

ラフトマリ

ホロアントマリ



クレトロタ

シニエメホリ

うきやれ
 五年の修路の
 けりり
 おろは籠を
 山は色を
 前

共ニシレトコ岬の方巡視の事を命せられし

注シレトコサキ々當島東南の第一岬クシユンコタンを去て三十余里極高四十六度余峻巖峨々として絶壁の地あり是は激なる潮勢白浪を溯り難所と唱ふ地名シレトコをシライトコの結語ありシラ々前も云岩々としてイトコを足る云儀あり岩の果と云

余亦あかく思ひしれ先能く土人ニ尋詢ひし區春許潭より東浦へ出る間道はシユンユヤ越と云り春秋の頃夷人の通路として夏の際ハ草木生繁り数十里の間人煙絶る難所ありはあれども東浦へ出る捷徑あれを格別僕従を賦しあは聊の又

夫して通路ありへきよりあり

注クシユンコタンより以北五里計してシユンユヤと云る所有其川とちよ入る少の陸を越日程六日あり東海岬ナイブツよ出る是をシユンユヤ越と云あり然る少クシユンコタンを出て東奥に到る也當時本道と称るは南の方叶々シヤニと云るに到り是より上ある沼は越此沼より陸路り少くを過て又沼あり東浦トシナイチヤへ出夫よりシヲチヨボカリウエンコタンリコヌシヘツリヲブツサキ^半シユマヲコタン^五リイヌ、シナイ^余ヲソエ^六コ^十ン^六ロ^十レイ^六ニシユシユウシナイ^十シユマヤ^半ナエブツと廻るあり其里程一倍に及ぶよりして夷人等歩

の時へ此レユレユヤ越の方を通るあり

余竊喜此道を踰て国界に至んことを堀使君は請ひ申せし
は使君その意をよみて人吏の煩はあらずは處置もあらずは
如何ありて其山越はへし命せられし然る此日矢口清三郎
直養も余も如く此間道を踰て国界に到らんことを村垣使君へ
建白したり其志暗合しとも亦奇と云へしは是は西人同行
して山越あるべきものよしを松前の家来は談し支配人清水平
三郎へも談し兎角して人吏糧食の手當も出来しれは此行の
志は遂は決しぬ

十九日今朝へ朝陰り昼の頃より空晴風吹出せり朝四時過

り頃一區春許潭と覆せり

余後一人名ハ直養も同一人名ハ熊打足輕水牧惣太松前家番人富

松豊吉嚮道者區春許潭の乙名イツポングタゴエの小使サーブ二
アイノ等あり人足はエ子アンベツ、エシマワセタボ、シラボク、ヨヲタ
ン、モンキワムツナ、ケトチン、エルシユトイ、カンコ、女夷はる不
ケラサケンピリケス、ケタフヤ、ヤエランマ、シラエト、ヲコランヌ、シユ
コシユイケ、上下貳十四人あり此内糧米の減はる不随中より
追々歸せり

三拾余町よりて雲羅此所より送りの人こと袂をかて此は
の番屋あり又去年より在留の魯西亜人の畑の試作りせし所

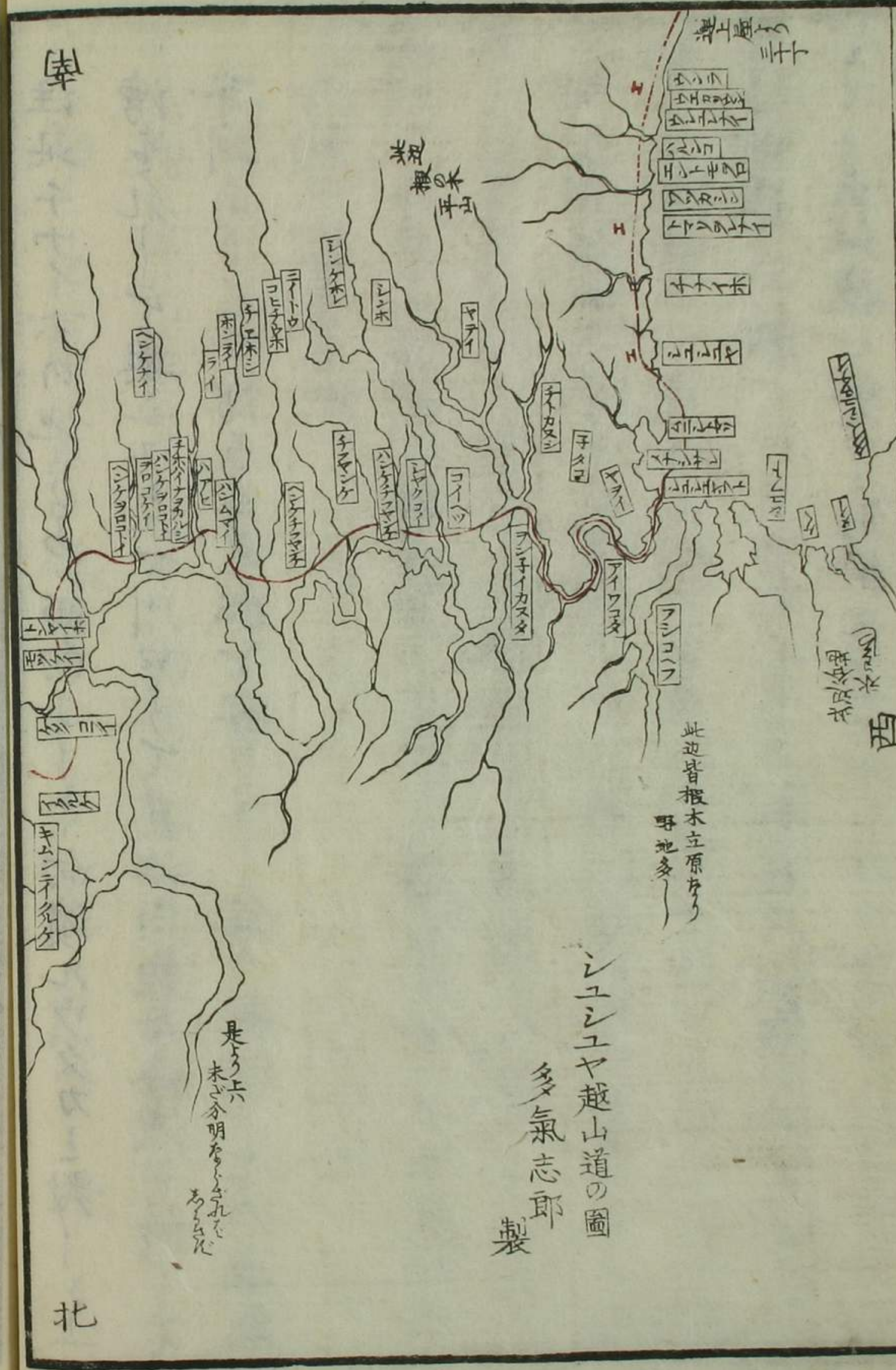
あり三畝歩程も有之蘿蔔^{ダイコン}吼^ゴ吧^{トヨ}芋^{イモ}あ^と作りてあり傍に番小屋の跡あり瓦を製したる跡摸^カ型^タ写^シ取^リ散^リあり

注ウラとつらる地形後ろの方槃^ト立^ト山^トあり其下は番屋一棟あり其邊り地味肥沃あり故に魯人^トも畑地を築し又其地の土をとりて瓦等を焼し跡有なり

夫よりウコカリウシ此所以前ハ夷家有より今ハふしウシエンナイ稻荷の社夷家三軒あり五町余ありエントモヲ口同武軒あり五丁よりトマリランナイ同四軒あり八丁余ありチナイボ此所は清水平三郎の持小屋あり是より明朝の潮を待てシユシユヤ川へ乗入る船ととて未と日と晩とされとと一泊りたり

注此チナイボの地より西向より向濱ルウタカと對し一湾をれし奥シユシユヤ川口より其内越而海淺し所より寄洲ありて干潟あり船を容るる依り此辺りより満潮を待て容るあり

此所より平三郎持小屋あり小舟の宿食も安かりき此処の前より六ヶ及歩斗の畑有て芦肥^{ダイコン}葛^{チサ}苳^{ニンジン}蘿蔔^{ゴボウ}彭^ゴ翁^{ボウ}菜^ウ等を作り芦肥を越年番人^チ一の食料として水腫を癒する奇薬のよし此後ろは炭焼の小屋あり是等皆平三郎始て仕りたるよし從僕等前濱より鱧の四五寸斗あるを取来りて食し鱧夷語をカバレイと云此夜ハ心よくお臥せり

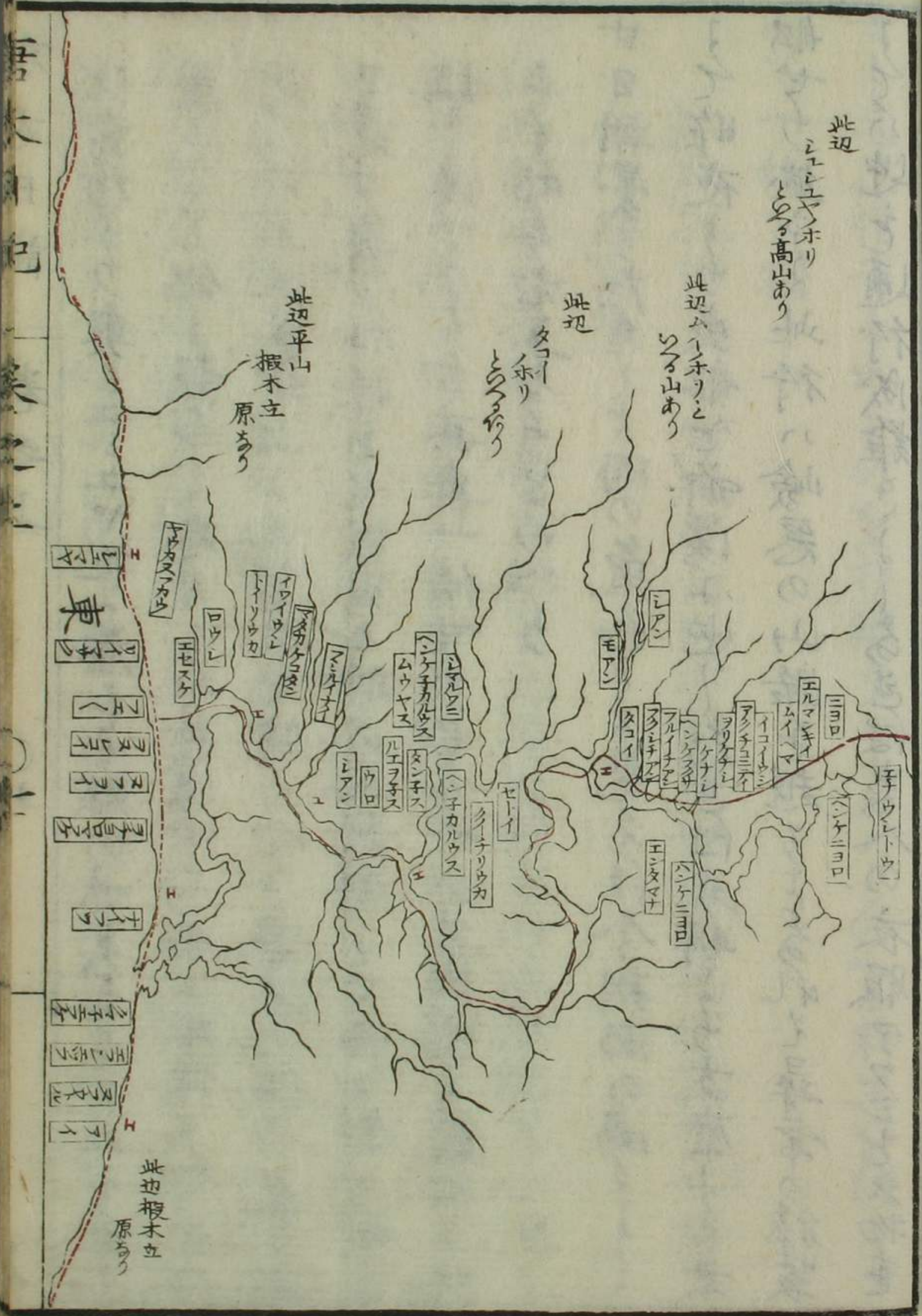


シユシユヤ越山道の圖
多氣志郎 製

是より去
未だ分明なきを
あきらむ

北

北



唐方圖記

此辺榎木立
原あり

此辺平山
榎木立
原あり

此辺
タコイ
ホリ

此辺ハ
ホリ
山あり

此辺
シユシユヤ
高山あり

注當所より奥シユシユヤ辺ニ産する鯨の味美ありと又其多く
産する他ニ穀をし冬日より此湾中一面ニ氷結り也山の
辺りの土人其氷上ニ大篝火を燃し穴を穿其火温の氣を集
り集る魚を括搶りて実取る羽の八龍湖より氷を割て網を
振り漁するより其魚一倍多し又其肉味も龍湖より比
より多しを美するなり

廿日朝曇りたきとも雨の氣色とも見え及今朝潮の満より
よて昨夜より夷船を前送り過りたきは未明より支度し乗
船せり然るに此行ハ峻急の山路を越るとされを尋常の服装
よりハ遊と通行成難きよしあるは夷人の衣服アツシと云物を

著し尾花帽子と云ものを打被りキナホスとのける脚半を附り
因て一絶を得たり

欲執孤筇窮峻奇風餐雨卧亦何辭樹皮短褐芭花帽也好
人呼為島夷

注此間道の道形もたき越を凡の目的と山沘水脈等より取て
丈より高き草の中を分り谷地中を走り行とあり故
に終日下柙の露深されぬ此装て行とあり其アツシと
いふ木皮ラキウにて織たものより其よきもの雷紋
柄のものを木綿りて縫綴り土人の常服尾花帽子ヲハナホウシといふ
芭花の穂より作りしりのあるもの羽の最上辺より出又

キナホスとのる奥羽にて蒲脚半カマバキとて寒地ハ本綿ワタにてハ
雪の中凍合してあゆむ急く又草深き所を越るゆハ一日も不
保々故より多く此蒲カマにて作りしを用ゆ是ハ南部領の沼宮内
辺より出其上品なるハ馬の尾と以て作り雪の中越る山中ハ
ハ甚よ路しものなり

凡半里程乗出したる頃より空の氣色俄よかわり雨降り出ると
ツライホ地名よりハ三丁余とてニユニユヤ地名夷家八軒あり三拾一
余とてニユニユヤ川口あり入口水深丈五六尺余川口午の三
中よりあり

注シユニユヤハ其地形後ろの方ハ鳳尾松トビの黒く繁る

山續きニユニユヤノホリとのるに靠て前ハ少々の岬を有し其
辺り蒲柳原ヤナキより水際ハ蘆荻多し其半ハ家居と為所と
此湾の第一奥の東岬よりて波浪少しと有りニユニユヤ柳の
夷言その多きにゆりて号せしゆ也是より土人等歩行の節
ハ川口の手前字メナシサとのるをて海を歩行しゆり
夫より山よ入て字チタエとありゆりゆり船にて行ゆハ一里も
沖を乗りて此川はちへ棹さし入る此川ハ湾中第一の奥の
方より洪水の節押出せし土砂多く処々ハ附測とありて船
動を乗ゆとて難航とる所あり

川は流りて四五丁程の左の方椴林の内ハ鷲の雛の梢より落

たらの驚て飛廻るを見附り番人豊吉船より飛下り續いて
 夷人共走り廻り終り捕りたり是を西使君へ献はせしめて
 水野氏へ書と添て歸り船の便なきたり此辺鴨の子雀の如
 くあまの赤群く水上を行き居いと路より川口より半道停
 して枝川へ入爰より船を棄て上陸せり此所字チタ地名と云由
 本挽小屋あり雨多ゆ強く降出しれを此雪の小屋は一泊せ
 と鐵を去りても兼て山越の日を積りて食糧と携へこれハ
 何程の峻急なりとも雨は障へらましく滞留ありやうして志を
 遂ぐるもあまくと鬼を角もして前路はすまんと決定して
 歩を進めぬ

和人と白朱夷人と玄朱して九十日程の食糧と負載しとの
 余の船よりトナイチヤよりナエブツの方へ回して積りして船
 一の今も引續いて出たきうなるれとも風潮は障へられ
 ぬ也東浦を回る内終り此船来りさうし
 注此船廻りの事ハ前よりいひたる如くチベシヤニより沼越ト
 ナイチヤへ引出し東海岬をナエフツへ搔送り行事あり
 此辺り兩岬とも檜檜夷松の木の林あり女羅數丈の長さとの
 懸りて地は垂りたる内地は絶て見えて唐画の山水の如き
 すと一絶を賦して其木の皮を削りて置

松掛女羅千尺長素絲翠蓋滿山香平生宸翫唯圖畫始識

人間有此疆

此道樹枝交加して眼を遮り頭を障へ枯木朽根路を塞ぎ脚を
 着るをなく雨は降くと降り固苦いふをかりゆし辛うして二里
 ほどすすみ少く小高き所より弁当をきひしり爰をメ、
 地と云小流ありて水清冷蚊の多きことと言語は絶たり火を焚
 少くは疎なるあり夫より壹里半程して字アライ地名と云
 此所少く小高深林の中へ小屋掛したり小屋掛と云るは氷の
 宜くあり所を撰て又小高き湿地ありと云と見えたりあり悪
 毒れハ腹痛の患あり湿地に臥す時ハ瘴氣を打きて病を得且
 虫の類多しして難養するあり扱小屋掛と云るは木より立

本へ枯木の丸をわきし是して屋根紐と云く其上を椽の木
 の皮して葺あり夷人とも事馴たまハ携くる鉄してその皮を
 剥きして辛卑と云ふものなり

注此山道中誰くても通称の崎小屋を架とも必と椽の立
 木の皮を上下長四尺斗に鉄目を入置て剥き是して葺く椽
 三四人の宿と云ふは小屋家根と云ふも其皮丸或十枚二十枚
 を用也皮を葺く本より必と一枚ありて剥きゆと云その剥
 取し本は枯朽るとのなり備て是時より小屋掛したるは云所の
 跡を余通行の時節見ると凡一ヶ所毎二百本余ありと云枯
 たり是等のありても此地樹木の多きことを知るべし

小屋の前より枯木を集めて終夜火を焚き急率に掛る小屋
なれど雨降出さず漏りて堪届くも何とぞを止る油紙あり
引掛て兎角して夜をぬぬ

廿一日昨夜より雨降り續きたり此の時以てアライ地名とて半

丁程にてアライ川より此川水清冷なりと爰にて嗽さぬ夫より

山道前日の如き擬地夷松の中を九十里程にてコイ地名と云地

より深草の中より小屋掛あり是より入て朝飯の極り飯を食

注此地一つの沼あり其沼周り九十里半是より落るをコイへッ

と云水清冷なりよりの出入等通行の節多し此所にて宿

をわり余り通行の時も此處より小屋ありよりの爰より爰より

来ることを得たりとサツコイと云るより露宿しぬ之ユニヤ

と云るは是より雪路ありは早着るとなれども夏道ハ中々

着し難し

番又寫松樹皮を剥て此所を始り通行せしむを記し其の病

みより余乃其本に漫書したり

草露鞭來山露新手排芽塞分荆榛風流宦吏過斯地開關

以來唯二人

此辺より左右草生茂り虎杖イヌハコに似て夷言ハソソと云まて款冬

夷言をコロクニと云ふ一圍余あるの路を塞き先は其を又ハ見ると

能つて其上泥濘より深き所ハ膝を没るを里河よりして小川を

渡り深林を分行くよ向より来るものあり東浦ヲタサンと云ふ
 所よりウクシユンコタン勤番の松前家士一同僚より書を書状の
 飛脚あり此夷人の話より先立の間宮寺へ積贈る米船をヲタサン
 洋にて傾覆し其米を失ひし故より来る飛脚ありと此米も
 我々糧に關係するもの各是よりして心を傷めしり爰より
 飛脚より別遣書食して歩を前あたると路は猶も急くさぬとの
 草紙を成し水葵の如くして葉の大ききものより積舌と云
 款冬のよく多くして以て大なる

款冬如竹鬱叢生葉々相重翠影清山路不妨多雨露一莖

代傘蔽頭行



唐大印記 卷之十一

注世間歎冬の大なるものと秋同歎冬と号て好事の人其業を
擲チり大き藤紙フジシ半ハ一ヒト又風強家多フエチカ是と筆ヒト此コノ地チの物
ハ是コノ倍ハして若藤紙ニシ擲チり対タハ全紙シ満ミへく是ともの
比ヒせ馬業ウマノ合羽カホと云イふ處ト云イふ

晝休ヒルノせし所トより武里余ブシと云イふ茂林シハ小懸コケと此辺コノ立
木キの中程ナカマを尻シりて扱アきたるやうなる跡アトあり依ヨて是コノ土人ツチノハ
向ムカうウ懸ケ懸ケの雪中ユキノ途ミチは迷マるルと云イふありと又是コノより武里余
行イてハハセセと云イふ所トハ夷人ヒノともト通ツ行クの爲メハ掛置カケるル小屋コナり
止ト宿スと

注此所コノハハセセと誌シされし實マコトハ此処コノハアセクシシといふ地

ありハハセセと此所コノより行イて先生シヤウ嗽ソウきし川カハをハシケナクと
いふ其川カハの向ムカうウし越ク而シテ此辺コノの土人ツチノ往來ウライとも此所コノの
川カハの此方コノ彼方ソノハ是北宿キタノ宿ヤドなりといふありといふト余オレも此川コノの
向ムカうウて宿ヤドきし

此小屋コノハ左右サマハ雨覆アメあり中ナカより火ヒを焚ヒき今イマ有ア直養チキヤウ余オレハ
云イふ糧食リヤウシキ給タマはせセ志シを遂ツ極クくク次日アシタを併ヒせて進シまんとすれドも
女子メノの人ヒト来キて接ツりた進シは意イを任マせセ及ツ依ヨるル某ナニ定サま進シんで糧
食シキの手當テウダウをさし行イ行李リヤウハ跡アトより搬運ハンウンせしシを余オレハ托タクき
とわら乃ナ其意コノ任マせセて余オレハ一日路イツニチノも後アト進シてはシと云イふと議ギふ
評ヒラ余オレ来キて直養チキヤウハ邂逅コウゴウせしと歎ナレふト此所コノハ續ツりて其意コノ氣キを

感し拍手して一笑と此深叢中数日の難程猛獣の凶虐と
 志く憚りまじ地ありふ直養強て前をとりて其意敢て糧食
 の為のこゝろあつてはし此辺り足は泥濘に没し面部は何
 やうな装とも忙懐の爲に責めらるるも同行の爲に却て取道
 て路をとりぬる時如何とあり難し余もクニエニコタン浩
 武人と同行のより隊長より言聞されしを其人の遅足と察し
 前所を於一日あつて只土人の道を百連て出立したるに按て遠
 りては又土人の遅足とて種々の奇話もありし他他日土人
 共より聞ゆつてもおのし

此夜の夷人共の掛る小屋をこれに床とさとのもちなく故強
 多くして紙帳の破り入り瘴氣肌を侵して眠るは苦き事なり
 き

廿二日朝の洞は曇り昼はより晴なり直養ハ朝疾く起り後僕
 共又番人富松共は嚮道者イツホンク共外人夫五人を引連糧
 米共外必用のものも持せり余より先は費せり余ハサ一後進
 てあつて山道廿町余も過てハ一セハツ水清く浅く傍り此
 川より嗽なり

注先生此川ハ一セハ有るよりハ一セハツと志すされり
 此山中ハ一セハツと云ふものなり出入此川と指しるべし
 ケナイと云ふありベンケら上と云ふとナイと別流也

此所ハ上の沢と云儀余ハ此川の上りて篇一ぬ
 又拾四五丁とて同一川の上も出るサアブニアイノ余と脊負
 て渡せり夫より一里斗りよと字イナヲカルと云る処より
 出ル此所木幣多く立て山霊をまつり

注此所亦名千ハホイナヲカルウシと云ある一柳の大木を
 其傍ニ往來の土人削花^{エナヲ}と建て拜する一行と云り其謂ハ
 昔此島ニ鍋の蓋を以てタコイニ住る焼く土を以て始て
 鍋を作り東浦の土人ニ其製を教へ夫よりして南濱より西
 浦の土人にも教へんと鍋と脊負此所まで越來りて風を過
 て破りたりと夫より意の違せざるを患ひて此処にて病

係り終り死せりと云り其跡を今神あり置き此辺りの土
 人往來の時として削花^{エナヲ}をまつて数日の途中の食糧を獲き
 此越さんとを祈り誓ふとのや此其土鍋を此島にて用ひ
 して昔の昔の赤本話一の物と思ひ居りし今度^{丁結}
 産堀君出浦の初よりユンナイとて右の圖せりぬと
 此を投出中よりほり出せりとて同所の土人獻ぎし中りて
 持帰らぬと云る侍り余も始て出端と用ひし昔傳り
 を信しぬ

又吉里余よりユンユヤの川より出ル此処をヲロコトイと云
 此辺りぬりの道のみあるれとも草生まらぬ深く歎きの

徑リ七寸余

深サ三寸五六分

手作リ厚サ

九三四分ヨリ

五分モ有款ナリ

土至テアラタ

砂マサリナリ



尋氣志郎

縮写

太くましく板の多きより言傳は纏るり更より同一板ある深藪
中を分てき里半程行てまことニユニユヤ川の端は出る

注此地ハ字ベンケヲロコトイと云あへし始めよわ川端を
ハンケヲロコトイと云下のワロコトイと云儀あり此辺り款
冬原あるる余爰は肉徒蓉と數十莖均くウクニユコタシ
の小徒ツクニウと云ふ頗物を各へ居る者あるの故は是を
とふよ何なるものぞと云ふ次物と云ふ連なるロレイの出入ア
カラカイ人^名のつるは是ハ夷言エバーと云て東海岸の土人ハ
撲傷^{ウチミ}折傷^{カシ}金創^{キリキス}等よ是を搗碎きて附る其切驗積と
依て考るは是ハ南濱より西よきと東海岬よきと云ふ

その形像日光山誌より本村園譜より出され畧す

土人等夫婦此所より小屋を作り居る名をスグロクと云女子を
たトヒンと云其侍より小川あり字モツケイと云よ其土人等
何の爲に來り住むとも聞ふ轉の漢と云又食料より用事アキラ
コロとの名村の根をほり來り居るあり依てと連する出
人等より直に煮て振舞う

注アキラコロは東西蝦夷地よその名にて此地是とハ一と
云則黒卷丹の工初り此餘ニヨカイと云ものあり是車卷丹
の工初り此トマと云て延胡索の根をも食用と云延胡索
ハ薬爲りして通名らヒツチリと云漢名を滴金卵と云生園

本村園譜より出され畧す次ハ一ニヨカイの二種と出 直
とのおめ

夫より小流を踰り何處も橋木橋あり半里程してやうく深林
の内に夷人の掛る小屋あり此所をエクルケ地と云此林と出て
廣き所より出り蝦夷松の緑深くして草の丈々高くす白き
總揚枝根のぬき草多しと云景を宜き地あり

注按より是草はあは菌草の一種あり雑木鬱茂し枝
葉落て腐る喬木倒れて朽ちるの地必し梅雨の次
め此ものを生じて余も此地よりして数十種のものを見ぬ
イナウシ地と云此原野を暫く過て又山道より入る式里余はて



琴氣志郎

寫真

車卷丹圖

黒卷丹圖

花色
紫黒ナリ

深林の中小高き所へ小窓掛くて夜をのぞきしを言ふ直養も居らぬいとわびいりたれと

辛苦嘗來雨又風寧堪獨臥亂山中別君最是傷心處今夜

司林唯草蟲

又

斜架危檐了木支潺湲先辨與茶宜泥鞋探嶮穿山骨秃筆
題詩白樹皮雲濕半牀無客伴草埋荒徑有熊窺怪禽夜叫
長松上獨寂幽奇就睡遲

注テナウシエナラウシの結構あり此地東西の境目よりて今
水の地あり依て往來の土人東より西よりハ割花を作ら

東の方の山靈は嘔乞し西よりなる者ハ西の神は嘔乞して連
申の安を祈るあり依て多く此所より立ち去り故に號するウニと
多しといふ儀あり

廿三日朝曇り吾時小屋を出て山林を暫く行ニヨロマトウ地名と
云ふ沼の端より出て夫より廣き野地より此地カンソウ萱州ウニの亂れを聞
は蔭蔭多く咲交りある地にて四方お開け少くは鬱氣を散
たうは甚とも坂の多きこの糠と振蕪のぬくうらさるるに
那く夫より又落虎杖多く生れりたす中を分け行は前行の
人ハ少くも見ゆるぬちり其蔭の大き根の所にてハ七尺七八寸も
廻りへりて是を屋余りて子モイ地名と云ふ処へ出る此所川あり巾狀

間斗来り山道又野地を過てタコエ地名の川上カモイチウといふ所
にて昼飯をまじく深藪の中はクニサハ箬交りあるを分てケナシ地名
到着又此所より小川あり其傍は夷小屋を軒あれども入るや又
同く処四五丁よりく中四五間の川は大きな柳の樹の傍よりく
橋をたると処あり枝ハ半天のぬき出て深翠叢とて一む身は
是を越て野地山林をたるとホクイチヤン地名といふ所にて休息あり
禅願光峯入の畫卷物より彼大江山より童子の岩窟の
まじり大なる河濱河を枯木を倒して載るはあり是生
おろくく人を其心拍して城へあひあらんと言ふ事あり
て竊笑しぬ



まねり
いし
あやうき
丸まけ

わらわ
あいのさ
あいの
存免

唐大日記 卷之四 十一

夫より拾丁余りてフルシチヤン^{地名} 渙小屋式軒あり又拾四五丁
 初てトノシチヤン^{地名} 此辺は夷家甚多ありて七歳斗と四葉斗の
 小兒或人並居をり此夷家ハ我ハ村集する人足ホニキツ人^名 夫妻
 の家あり妻ハシユコシイ^名 家ハ老人或人あり云此
 小兒ハホニキツ^名 子と愛する様し
 置クシユコ^{地名} 夫婦^名 行て居る此邊の人まは
 常々れらるあり今日ハ已う家ハ立寄るもの^名 止宿る
 牙字^名 此処より^名 同^名 道と約と凡三丁余り
 て郷導サアブニアイ^名 の家ハ著せりサアブニ^名 當時家内九
 人等^名 のよう^名 春屋斗り^名 及寄合世帯のよう^名

小屋ハ四間ハ三間半も^名 煙をこら切てあり其一段高き
 所^名 キナ^名 と^名 余^名 余^名 サアブニ^名 寶物と
 見せ^名 一本^名 柄^名 上^名 延^名 中^名
 赤^名 其^名 靴^名 と^名 出^名 然^名 此^名 紋^名
 も^名 靴^名 入^名 又^名 外^名 銀^名 箔^名 と^名 貼^名 草^名 蒲^名 刀^名 の^名 身^名 相^名 の^名 板^名
 あ^名 作^名 を^名 見^名 余^名 ピリ^名 かく^名 と^名 賞^名 け^名 サ^名 ア^名 フ^名 ニ^名 も^名 其
 賞^名 せ^名 と^名 何^名 思^名 ひ^名 也^名 笑^名 次^名 中^名 カ^名 マ^名 ス^名 の^名 内^名 女^名 の^名 古
 着^名 と^名 出^名 是^名 ハ^名 彼^名 晴^名 れ^名 他^名 生^名 壱^名 毛^名 襦^名 袢^名 拵^名
 の^名 紋^名 附^名 是^名 を^名 折^名 疊^名 巾^名 子^名 ハ^名 赤^名 唯^名 加^名 次^名 の^名 内^名 押^名 入
 た^名 是^名 ハ^名 揉^名 雜^名 糺^名 と^名 謂^名 今^名 宵^名 ハ^名 山^名 中^名 と^名 違^名 ヒ^名 安^名 心^名 して

うき野ね

注此処平地より東の方のタユイノホリより落る河と南ニヨ
 ロマイの方へ落る川と合して是より五里斗を下りナイ
 ブツ川より落る河より人家九軒ありてサアブニと此所
 の小使役やるもの故に家も相應に大くして余も此家にて
 止宿せしありし時寶を乞へばやそし一本拵子にて
 櫛のよへ棄り延かきとせとせりし中より古着を授けり
 大き刀の身と本と鞘とを出し見せしりけりしは身も
 志て子母樋子巴の紋と云程彫きしり其鞘ハ出人より
 の細よりあるや揮りて短くと巻を極雅味ありし



唐九國記
 卷之四
 三

叢教とくまきとのゆり扱其傍の柱を以てて文字指のとの
有りぬは是を問う、矢口ニシハの大ニヒと答へて見せり
如何とも手垢して黒くあり終は讀むことを始りしも
送恨ありける

拙るゝ余是を何処にもせよ落書すゝんぬとのりて生来は
麻附あるを徒ら事と志むの情甚しく依て余は落書つ云
らぬを以て其は麻附するはありし此度の行処も山
中にて絨目等を以て夫を目的とて心未だなるにあり有
らぬは我も休む所は必は何處とも志す一置りしとこれ
をいひゆり依ていふ人を得ずも其人は生任は當れぬ用を

を以てて遠くを延へ用ひたり如何に英雄豪傑優りて
も驚馬はおとろく一落書絨目も堂社の柱礎並の白壁杯
いと有用ありとのことあり編りかゝる山中にて見ゆる村ら
一照の直も金とて定むる

廿四日晴くみサーブニの宅を出て前の川を渉りてまて
深茅の内へ入らり歎冬その余のまの是をてよりと生後り
て悪きものんかゝるあートウニトウ地名の服と通り山より路
地を以て小川はあゝりウロウと云所あり爰して島雀の鳥
よ逃げまじると捕へく深茅の内へ移ちやうり夫より峠の
中を歩めてミアンチヤ地名と云ふ此所夷家二軒エラン人名と

云々の家も休む此家も直養も休む一也なり此小家の前
 は搬夷船を備へたり依て是より乗れる川中或は船余も有
 船一是タコエの川下あり兩岸垂柳して屈曲し拾一余
 してオシ子ナイ地名と云川は落合是より幅廣くありあり
 注此処余を通りしより少く異なり余らタコイより山道を
 里半計りありくへン子カルウ地名と云るの処より三里余も
 下り此ニアンチヤのエフレハの家にて休む夫より廿一余も
 ちくナエブツへ下るあり此ナイフツ川ハ西北より落来りて
 此川の本川と云是より上より人家或は村もある一也
 是より河中七八拾間も及びしを過ぎるり四里より六里
 位も及ぶ當島トツリ以南の第一の巨川に水約も

多し

キニウシ地名アフコタン地名ビラボ地名ありて過て三里程してホロスウ
 川岸より多く船より此所より女夷を人停居て声と掛りり搬
 夷船或は船より余り舟中のサーブ人名と物語りてやがて
 乗来る船と交りて乗替りたり此処より雨頻り降出し
 寒し堪はざる其形状と云ふもや女夷薪の燃えしを持
 来たり火鉢持の物ありれをきん程も有る板より置きたり
 手と暖めたり程あり薪は石をたきても板より燃えたり暖あり
 此処右の水より水約付く首と出たり船を窺ふもこの川

岸より鬼の居るをりてサーブニは関ハ是をヲリケエ鬼の夷言と
 つり夫より里中へは七里余りしてナエブツの岸より青竹中を
 行き夷言を著しと通辞の豊吉と跡船として後進より無く
 糧米のり心はかき余柳が是へくく夷言をのりく運上屋
 千ツフアマ、アンナと問へ夷人等首をふりてイシヤムくと
船の爰より大は望と失ひ如何いせんと案へ燃ひきり雨ハ
 ちり強く寒きん堪へ進は禁火とて身を暖め
 濡る衣敷と乾くを候ふ間く跡船を著て夷言を通し
 直養の書くる書状と取出しと漸く事情もあつたり先々
 直養の心構へは賜りて武苞の米ハ是迄の間宮米持行りし

余等との為しユニコタンよりおくらき米ハ未と著せと先迄の
 為し跡より賜る米船ハ昨日此地を過てオタサ地名と云所中を
 行進するよりあるは此船と引留て糧食の手当はあはし
 とて直養とオタサ地名とて走り行はしむるなりから
 故に我等も同行の糧食ハ如何と云と十方は暮るし
 評先生十方は尋れらむ目眩は見ざるぬ
 今白米ハ漸くハ味あり云米も亦幾あるよりあるは豊吉や爰
 志く是より武里斗りも南あるユニコウシナイと云所より云米
 半斗入加満と取寄りし是めて皆く力を尽して此夜より云米
 と食とてと議して齋したる焼酎と酒のみりて喫して

打郎より其家の至入の名をワーチマアイノと云ふ

注此処ハ東海岸より一萬里の波濤目よ深きものあり此河ハ
壯地第一の大流沢目數十里開くも源ルルウタカノホリより
来り其川口の南畔に家居とナイブツと沢の入口との小儀
の熱而水心塩氣を食て悪し武捨所も上の壯岸一
の沼あり元四り武里もあり其河より皆根本之系海岸より
五鬚松の長き木より武丈位の木の林となりたし秋より来
此河より鶴居に於て流くの水多きなり此は此の川の深なり
さしき家の内より武捨し物捨しと云ふも武と好ありと
て関より難きほどありと云

